令和６年度岩手県中学校新入生学習状況調査結果の概要について

岩手県教育委員会事務局
学校教育室学力向上担当

【要旨】

・**平均正答率**では**国語は昨年度を５ポイント上回った**一方、**数学は５ポイント下回った**。
・**国語**においては、**知識・技能、思考・判断・表現（書くこと、読むこと）において正答率の上昇**がみられ、指導の改善が進んでいるもとの考えらえる。
・**数学**においては、**知識・技能、思考・判断・表現のいずれも昨年度より下回った**。また、領域では**「変化と関係」において落ち込みが大きい**ことから引き続き指導の改善が必要である。
・**生徒質問紙調査**では、**小学校での指導に関する項目について昨年度とほぼ同様**の結果であった。
・**各関係機関**は、学校において以下の取組が推進されるよう**支援を継続**する。
　小学校：出題趣旨と出身小学校別の調査結果資料から、**小学校での学び全般の実態を捉え今後の教科指導に生かす**こと。
　中学校：生徒一人一人の学習状況を把握し、その結果を基に**中学校３年間の指導計画の作成及び指導の改善を図る**こと。

Ⅰ　調査概要

１　趣旨

（１）中学校第１学年（義務教育学校第７学年含む）の生徒一人一人の学習の定着状況を把握し、その結果を基に中学校３年間の指導計画の作成及び指導の改善を図る。
（２）各小学校（義務教育学校）において、出題趣旨と出身小学校別の調査結果資料から小学校での学び全般の実態を捉え、今後の教科指導に生かす。
（３）全県的な規模で小学校修了段階における学習定着状況を把握するとともに、明らかになった学習のつまずきを分析し、学習面における中１ギャップへの対応と、今後の中学校３年間の授業改善に生かしながら、本県児童生徒の学力向上に資する。

２　実施内容

調査種類	実施日	調査対象	対象数
教科調査 児童生徒質問紙調査	令和６年４月 18 日(木)	公立中学校第1学年・義務教育学校第7学年	9,064 人

３　教科等の実施状況

実施学年（実施校数）	国語	数学	生徒質問紙
中学校第１学年（144 校）	8,493 人	8,488 人	8,473 人

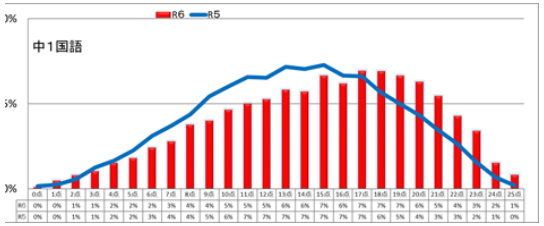
Ⅱ　調査結果の概要

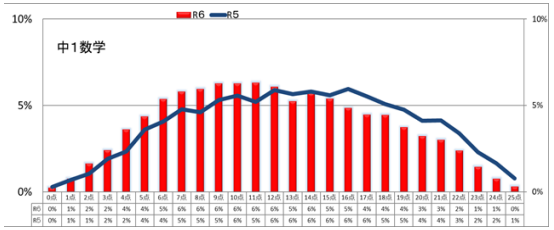
１　教科調査の結果

（１）各教科の平均正答率及び中央値

中学校１年		
教科	平均正答率　（　）は R5	中央値
国語	59.0%（54.0%）	60%
数学	48.1%（53.1%）	48%

R6…棒　　R5…折れ線





（２）中学校１年国語　　※〇は「できている」と考えられる小問。●は「課題がある」と考えられる小問。

①観点・領域等の平均正答率

観点・領域等		平均正答率　(　)内はR5	経年比較
知識・技能	7 問	68.7 %（61.1%）	△ 7.6
思考・判断・表現（話すこと・聞くこと）	4 問	57.6 %（65.1%）	▼ 7.5
思考・判断・表現（書くこと）	6 問	56.8 %（52.1%）	△ 4.7
思考・判断・表現（読むこと）	8 問	52.9 %（43.8%）	△ 9.1

②経年比較問題の状況

ア〔知識及び技能〕※該当なし	R5	R6	比較
イ〔思考力，判断力，表現力等〕（話すこと・聞くこと）※該当なし	－	－	－
ウ〔思考力，判断力，表現力等〕（書くこと）	－	－	－
○　根拠に基づいて自分の考えを書く。	61.1%	64.2%	△ 3.1
●　資料から読み取ったことをまとめて書く。	30.5%	32.8%	△ 2.3
エ〔思考力，判断力，表現力等〕（読むこと）			
●　描写を基に、登場人物の心情を捉える。＜大問３(2) ＞	54.7%	51.0%	▼ 3.7
○　文章の構成を捉えて読む。	28.8%	50.1%	△21.3

③経年比較問題以外の小問の状況（特徴的なもの）

ア〔知識及び技能〕	R5	R6	比較
○　文の構成について理解する。（主語と述語）	46.4%	65.0%	△18.6
○　日常使われる敬語を正しく使う。	79.9%	81.6%	△ 1.7
○　文脈に沿って、漢字を適切に使う。	26.5%	55.2%	△28.7
●　熟語の構成を意味との関りから理解する。	77.1%	69.4%	▼ 7.7
イ〔思考力，判断力，表現力等〕（話すこと・聞くこと）			
○　目的や意図に応じた資料を活用する。	－	64.0%	－
○　話の内容が明確になるように、構成を考える。＜大問１(1)＞	－	83.1%	－
●　相手に伝わるように、理由や事例などを挙げながら話している。	－	39.2%	－
ウ〔思考力，判断力，表現力等〕（書くこと）			
○　文章全体の構成や書き方に着目して文章を整える。＜大問２（10）＞	61.5%	80.3%	△18.8
●　目的や意図に応じた書き方の工夫を捉える。	72.3%	47.1%	▼25.2
●　段落構成を考えながら指定された長さの文章を書く。	46.5%	44.8%	▼ 1.7
●　本問（小問 25）の**無解答率**	24.3%	24.7%	△ 0.4
エ〔思考力，判断力，表現力等〕（読むこと）			
○　表現の仕方を捉えて読む。	42.4%	61.5%	△19.1
○　目的を意識して、中心となる語を見付けて要約する。	43.7%	65.1%	△21.4
●　目的に応じて、必要な情報を捉える。	71.4%	69.3%	▼ 2.1

（３）中学校１年数学　　※〇は「できている」と考えられる小問。●は「課題がある」と考えられる小問。

①観点・領域等の平均正答率

観点・領域等		平均正答率　(　)内 R5	経年比較
数と計算	6 問	62.5%（67.2%）	▼ 4.7
図形	5 問	30.8%（29.8%）	△ 1.0
変化と関係	9 問	46.7%（55.8%）	▼ 9.1
データの活用	5 問	50.5%（52.2%）	▼ 1.7
知識・技能	15 問	55.2%（59.7%）	▼ 4.5
思考・判断・表現	10 問	37.4%（41.3%）	▼ 3.9

②経年比較問題の状況

ア　［数と計算］	R5	R6	比較
●　線対称な図形を構成することができる。	41.9%	40.3%	▼ 1.6
○　割合を求める場合に除法の式に表すことができる。(R5 商が 1 より小さくなる除法について正しく式を立てることができる)	59.0%	60.0%	△ 1.0
●　比の利用の問題を解くことができる。	58.2%	57.9%	▼ 0.3
イ　［図形］			
●　基本図形の面積の求め方を生かして、円の面積の求め方を見出すことができる。	41.7%	41.5%	▼ 0.2
●　角柱の高さについて理解している。	32.3%	32.1%	▼ 0.2
ウ　［変化と関係］			
○　比較量の求め方を式に表すことができる。＜大問５(1)＞	49.2%	49.3%	△ 0.1
○　比較量の求め方を式に表すことができる。＜大問５(2)＞	68.4%	68.4%	－
●　比例のグラフから、知りたい数量の結果を導くことができる。	40.2%	37.7%	▼ 2.5
●　比例の関係を用いて、問題を解決することができる。	37.3%	36.1%	▼ 1.2
●　平均する方法について考え、数学的に表現することができる。	47.9%	44.8%	▼ 3.1
エ　［データの活用］			
○　ドットプロットからデータの特徴や傾向を読み取ることができる。	59.1%	56.5%	▼ 2.6
●　ドットプロットから中央値を求めることができる。	42.2%	41.4%	▼ 0.8
●　データの特徴や傾向に着目し、代表値などを用いて問題の結論を判断することができる。	48.3%	49.0%	△ 0.7
●　落ちや重なりなく組み合わせを調べる方法を考えることができる。	63.4%	60.6%	▼ 2.8

③経年比較問題以外の小問の状況（特徴的なもの）

ア〔数と計算〕	R5	R6	比較
○　異分母分数の加法の計算ができる。	74.8%	81.3%	△ 6.5
イ〔図形〕※該当なし			
ウ〔変化と関係〕			
○　２つの数量の関係を式に表すことができる。(R5 は数直線上に表すことができる)	26.2%	57.4%	△31.2
エ〔データの活用〕			
●　比例の関係について理解している。	75.9%	64.2%	▼11.7
●　反比例の関係について理解している。	62.0%	22.3%	▼39.7

※本資料の作成においては、授業改善の視点から、各領域・観点で特徴的な結果となった小問をできるだけ多く取り上げた。
※「平均正答率」についての留意点
　各年度の問題の難易度を厳密に調整する設計とはしておらず、年度によって出題内容も異なることから、過年度の結果と単純に比較することは適当ではない場合があること。

（４）小学校の改善の状況

①　調査結果から小学校での学習内容について定着が図られていたり、改善が見られたりした小問が多く見られ、**検証改善サイクルに基づく授業改善の取組が進められていることが伺えるが、不十分な点もあり、児童のつまずきに着目した授業改善により一層取り組む必要がある。**

②　特にも、調査対象となった領域・観点等における課題が見られた**小問や領域等に着目して、学習指導要領が育成を目指す資質・能力を全教職員で共有し、学校全体の教育課程の改善につなげること**が引き続き求められる。

（５）本調査において課題の見られた思考力・判断力・表現力等について

各教科の指導にあたっては、次の資質・能力目標を意識し、育成を図りたい。
・事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握する力。
・筋道の通った文章となるよう、文章全体の構成や展開を考える力。
・図形を構成する要素や図形間の関係などに着目し、図形の性質や図形の計量について考察する力。
・伴って変わる二つの数量やそれらの関係性に着目し、変化や対応の特徴を見いだして、二つの数量の関係を表す式、グラフを用いて考察する力。

（６）教科調査結果の活用と今後の取組

上記（２）～（５）を踏まえ、小中学校において以下の**取組を推進することが必要。**

①小学校
・出題趣旨と出身小学校別の調査結果資料を分析し、指導上の課題を洗い出し、自校の教育課題の改善に生かすこと。特に課題の見られる内容や領域においては、単元の指導計画等の見直しを図ること。

②中学校
・生徒一人一人の学習の定着状況を把握し、その結果を基に**中学校３年間の指導計画の作成及び指導の改善を図る。**

③小中共通

ア「確かな学力育成プラン」を用いた検証改善の推進

注視したい check（把握・分析）の例
・児童生徒に身に付けさせたい資質・能力は身に付いたか
・どんな指導が効果的だったか
・基礎的・基本的な内容の定着は十分だったか
・指導が不十分である内容は何か
・学習指導要領で育成を目指す「知識及び技能」のうち、何が児童生徒に身に付いたか
・学習指導要領で育成を目指す「思考力，判断力，表現力等」のうち、何が児童生徒に身に付いたか
・「学校が育成を目指す資質・能力」が児童生徒に身に付いたかどうかを測るための指標をどのように計画するか

・今後の諸調査を、学校としてどのように活用するか

イ　校内研修等の充実

・本調査結果について課題の見られた点を中心に、教員の指導力の向上、指導内容や指導方法等の改善を図るため、校内研修等を適切に実施すること。

・各種資料等を積極的に活用すること。調査結果の分析・検証の結果については、学校全体で共有し、調査実施学年以外の学年や調査実施教科以外の教科等の指導改善等にも活用すること。

・中学校区内で課題を共有すること。

ウ　自校が作成した「確かな学力育成プラン」を活用し、継続的な検証改善サイクルを確立すること

＜取組の例＞　※「令和５年度学習定着度状況調査実施の手引」に記載の内容と同様。

・「調査問題のねらい」、「授業実践アイディア例」等を活用し、自校の課題を洗い出す。

・校長のリーダーシップの下、全教職員によるカリキュラム・マネジメントを実施し、各学年・各教科等で確実に育成したい資質・能力を明らかにするとともに、単元の指導計画等に位置付ける。また、検証改善サイクルの見直しを図り、授業改善を推進する。

・校内研究計画等との関連を図り、児童生徒に身に付けさせたい資質・能力を明確にした授業づくりの実践を充実させるとともに、教員の授業力向上につなげる。

２　生徒質問紙調査結果

（１）メディア時間、学習時間等に関する質問に対する回答結果　（%）

平日（月曜日から金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、テレビやビデオ、DVD を見ますか。

	４時間以上	３時間以上、４時間より少ない	２時間以上、３時間より少ない	１時間以上、２時間より少ない	１時間より少ない	全く見ない
R5	15	17	25	26	14	3
R6	14	18	25	26	14	3

平日（月曜日から金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、携帯電話やスマートフォンを利用しますか。
※電話、メール、ゲーム、動画視聴、インターネット検索、LINE などの SNS 等
※学習に使用する時間は除く

	４時間以上	３時間以上、４時間より少ない	２時間以上、３時間より少ない	１時間以上、２時間より少ない	１時間より少ない	全くしない
R5	16	17	24	23	13	6
R6	14	16	24	24	15	7

学校の授業以外で、平日（月曜日から金曜日）、１日どれくらいの時間、勉強しますか。
※学校や地域での朝や昼、放課後学習等も含む。　※塾での勉強や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む。

	４時間以上	３時間以上、４時間より少ない	２時間以上、３時間より少ない	１時間以上、２時間より少ない	１時間より少ない	全くしない
R5	4	16	53	22	4	1
R6	5	15	50	24	5	1

（２）学習習慣等に関する質問に対する回答

質問項目	R5	R6	比較
家で、自分で計画を立てて勉強していますか。※積極肯定回答の割合	73	73	―
学校の宿題などに加え、弱点を克服する学習に取り組んだり、発展的な問題に取り組んだりしていますか。※積極肯定の割合	72	72	―
学校の宿題だけでなく、自主学習に取り組んでいますか。※積極肯定回答の割合	―	64	―

（３）小学校での学習に関する質問に対する回答結果（積極肯定回答）

質問項目	R5	R6	比較
授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか。	41%	40%	▼1
授業では、学級の友だちとの間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていたと思いますか。	51%	52%	△1
授業では、振り返る活動で、その時間の学習内容で何が大切だったかが、わかったと感じていましたか。	50%	49%	▼1
先生は、授業やテストでわからなかったところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれましたか。	64%	64%	0
あなたは、授業で分からなかったところなどや、理解していないところについて、自分で調べたり、先生や友だちに聞いたりして、解決していましたか。	55%	54%	▼1
友だちと話し合うとき、自分の考えを相手にきちんと伝えながら、少数の意見にも耳を傾け、意見をまとめていたと思いますか。	47%	46%	▼1
学級には、授業中の先生からの質問や、教科書の問題の答えなどについて、間違っても認め合える雰囲気がありましたか。	55%	53%	▼2
道徳の授業で、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする学習活動に取り組んでいたと思いますか。	60%	57%	▼3
国語の授業で、自分の考えを話したり書いたりするとき、考えの理由が分かるように気を付けて書いていたと思いますか。	47%	46%	▼1

国語の授業で、文章を読むとき、目的を意識して、必要な情報を見つけながら読んでいたと思いますか。	45%	44%	▼1
算数の授業で、問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いていましたか。	63%	62%	▼1
算数の授業で、公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしていたと思いますか。	56%	59%	△3
外国語の授業で、英語を使って自分の考えや気持ちを伝え合うことができたと思いますか。	49%	49%	0
テストで間違えた問題について、間違えたところを後でやり直していましたか。	39%	39%	0

（４）生徒調査結果から

ア　携帯電話やスマートフォンの使用時間が３時間以上の生徒の割合は昨年度と比較し減少。
イ　学校以外での学習時間が２時間以上の生徒の割合が減少。
ウ　小学校での学習に関する項目において、積極肯定の割合が改善傾向にある項目は１項目。既に通知済みの「令和６年度岩手県新入生学習状況調査４層クロス集計資料」等を参考に、各校での取組を焦点化し、組織的に取り組む必要がある。
エ　なお、各小・中学校においては指導の一層の充実を図るため、以下Ⅲ、Ⅳの取組を推進することが必要。

Ⅲ　学力向上に向けた本年度の取組　※令和６年度学校教育指導指針から抜粋

＜目標＞　つまずきを生かした児童生徒一人ひとりの資質・能力の向上

＜重点＞　学校の組織的な取組を土台とした全県共通取組

・諸調査結果の積極的活用による検証改善サイクルの構築と確立
・主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業研究の活性化
・児童生徒の発達の段階を考慮した家庭学習の内容の充実と習慣化
・学習の基盤となる言語能力の育成

＜具体的取組＞

下記のア～エについて、全県での共通の取組として、学校の組織的な取組の一層の強化を図る。

ア　諸調査結果の積極的活用による検証改善サイクルの構築と確立
①　校長のリーダーシップの下で、自校が作成した「確かな学力育成プラン」に基づいて、主任層が中心となり、年間を通した取組で資質・能力の育成を図る。
②　諸調査の結果から学年や教科を越えた課題を洗い出し、全教職員で課題解決を図る。

③　各教科で解決すべき課題について、教科担当を中心に校種や学年を越えた学習内容の系統性を踏まえた課題解決を図る。

イ　主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業研究の活性化

①　単元や題材など内容や時間のまとまりで、身に付けさせたい資質・能力を明確にした授業づくりを実践する。

②　研究協議では、指導と評価の一体化の観点から、児童生徒に身に付けさせたい資質・能力が身に付いたのかについて協議し、各教科の共通理解を図る。

③　授業研究会や互見授業の目的、授業を見る視点等を校内で共有し、授業づくりについて校内の人材を積極的に活用しながら学年や教科を越えて教師同士が学び合う場を設定する。

④　学校の実情に応じて、ICT 活用の目的や方法、場面等について学び合う場を設定する。

ウ　児童生徒の発達の段階を考慮した家庭学習の内容の充実と習慣化

①　家庭学習については、意義と自身の家庭での生活を関連付けて考えさせたり、学習計画の立て方や学び方について振り返らせたりしながら個々に合った学習習慣を確立させる。

②　家庭学習を宿題と自主的・自発的な学習に分け、自主的・自発的な学習については、個々の学習内容や取組方法等について評価したり、アドバイスしたりしながら質的な改善を図る。

③　ICT の活用を学校内に留めず、新たな学びのツールとして家庭学習での活用についても校内で共通理解を図り、保護者の理解と協力を得ながら活用の充実を図る。

④　幼小中高といった異校種間の連携の視点とする。

エ　学習の基盤となる言語能力の育成

①　教育課程全体で「話すこと」、「書くこと」の指導の充実及び徹底を図る。

②　授業においては各教科等の指導のねらいを明確にした上で、言語活動を適切に位置付ける。

③　幼小中高といった異校種間の連携の視点とする。

Ⅳ　学校の組織的取組の一層の強化に向けた学校支援と各公所の連携

１　学校の組織的取組の一層の強化に向けたに「確かな学力育成プラン」基づく学校支援

県教育委員会では、「確かな学力の育成のための目標と重点」を、上記「Ⅲ学力向上に向けた本年度の取組」のとおり示しており、その実現に向けて、学校の組織的取組の一層の強化に向けた「確かな学力育成プラン」に基づく学校支援に取り組んでいる。

２　各公所の連携

各公所が連携し、学校が調査結果を踏まえた取組を推進できるように連携を図ること。

（１）学校

教育事務所、市町村教育委員会の相談・支援を積極的に活用すること。

ア　学校からの相談内容に関する指導・助言等

イ　学校質問紙調査において「積極肯定」に至らなかった、「教育指導の改善」についての質問項目に関する指導・助言等

ウ　教科調査の結果のうち、特に課題の見られた点とその要因として考えられる事項に関する指導・助言等

エ　「基礎的・基本的な内容の定着」のための指導計画等の在り方に関する指導・助言

オ　教員の学習指導要領の趣旨の理解促進に関する指導・助言

カ　「検証改善サイクルの確立」の視点からの、「校内研究の在り方」に関する指導・助言

キ　市町村教育委員会が学校に求める事項に関する指導・助言

（２）市町村教育委員会

所管の学校の調査結果についての分析を進めた上で、各学校に対しては、状況に応じて、以下の事項について取り組むことが考えられる。

・校長会議や主任層を対象とした会議・研修会等で、本調査結果を踏まえ、小・中学校が校種を越えて児童生徒のつまずきへの対応や資質・能力の育成に向けて取り組むための資料として活用する。
・課題の見られた点を中心に教職員の指導力の向上、指導内容や指導方法の改善を図るための研修等を適切に実施すること。
・所管の学校からの相談に適切に対応すること。
・学校の実状を踏まえて積極的に支援すること。

（３）教育事務所

管内の学校の調査結果についての分析を進めた上で、市町村教育委員会と連携し、以下の事項について取り組むことが考えられる。

・各学校における調査結果の分析を活用した「確かな学力育成プラン」を基にした組織的な取組の強化について、各種研修会や訪問指導等を通じて、継続的に支援していくこと。
・検証改善サイクルモデル校や小学校訪問対象校の取組を支援する。
・教科調査等で明らかになった課題について、その解決を図るための授業について提案する機会を持つ。
・その他、必要な指導、助言や支援等を行う。
・学校における諸課題について、取組の改善を促すとともに積極的に支援する。

（４）県教育委員会

教育事務所、市町村教育委員会と連携し、以下の事項について取り組む。

・教科調査結果と質問紙調査結果から分析資料を作成し、各学校での分析の手法として提供していく。
・各学校における調査結果の分析を活用した「確かな学力育成プラン」を基にした組織的取組の強化について、各種研修会や訪問指導等を通じて、継続的に支援していく。
・分析結果を各学校への訪問等の際に活用しながら、授業改善に活かし、指導と評価の一体化を一層推進していく。
・諸調査結果を効果的に活用し、組織的取組を土台とした授業改善を推進する学校の実践事例の普及・拡大に取り組む。
・資質・能力の育成を目指した授業研究会の在り方や、研究主任への指導について、指導主事と共通理解を図る。
・必要な指導、助言や支援等を行う。
・学校における諸課題について、改善の取組を促すとともに積極的に支援する。